

とらうべ

すてきなことは近くにある

伊藤朋子

助産婦(仙台市)、「じょさんぷりん」代表

卒後12年目を迎え、ささやかな助産院を開設することにしました。金なし、土地なし、人脈なし、の3重苦のなかで、「助産院を創るのが夢なの」と明かしたとたん、あれよあれよと情報が集まり、仲間のパワーに背中を押され、現実のこととなりました。心を砕いてくださった多くの方々への感謝の気持ちと、責任の重さへの緊張をもって、この春を迎えます。

仙台では、「M&M」(母親と助産婦のネットワーク)と「じょさんぷりん」(助産婦の自主グループ)という2つの会が、「いいお産の日」をきっかけに生まれ、活動しています。様々なグループが活動をし、お母さんたちが助産婦に期待してくれているのを知って、「もっと助産婦の仕事を話そう」と私たちは集まりました。この2つの会が、私の元気の素です。

「いいお産の日」に出会うまでは、いつでも、「すてきなことは、遠くにあるもの。私たちには手に入らないもの」として初めからあきらめてしまうムードが蔓延していました。「フリースタイル出産？ 良さそうだね～」「パースプラン？ 聞いてやりたいよね」「ミルク？ 本当は置きたくない」と言いながらも、自分たちは、「医師がダメって言うに決まってる(まだ相談してないでしょう?)」、「うちの病院じゃできないよね(やってみなくちゃわからないのに?)」「妊婦の意識が低いからね～(失礼な!)」と言い訳をしあって、行動を起こさずに来たように思います。

助産婦は病院という組織の中では少数派、孤独な存在。開業助産婦も

レッドデータブックの絶滅危惧種(先輩方、口が悪くてすみません)。「助産婦！ 助産婦！」と自己主張しても、数では看護職員の一割にも満たない。少子高齢社会で病院の中では浮き上がるばかり。ビジネスライクに割り切って、そつなく仕事をこなし、プライベートを楽しむ……というのもサラリーマン助産婦の正しい生きる道。

同じ助産婦でも「お産大好き」のお産フリークが満足できる、助産婦の仕事をみっちり語る場が、あなたの勤務する病院の中で持ちにくい、ということはありませんか。

「じょさんぷりん」は、やっと2歳になったばかりの若いグループ。昨年は「生き活き助産婦・産む人のニーズにこたえたい、助産婦本来の力を100%発揮できる環境創りを考える」というシンポジウムを開きました。最近の話題の中心は、病院外出産での医療との連携などです。職業アイデンティティを確認し合い、地元へ根ざした情報交換と気軽な語り合いの場として、毎月集まっています。M&Mは、「消費者であるお母さんたちが求めるものを、声にして医療者へ伝えよう！」というコンセプトで、いいお産探しのワークショップを定期的に開いています。

私がしたかった「いいお産」は、誰かもしたい「いいお産」でした。イベント開催、助産院開業等、一人でいてはできないようなことが、組織を越えた人間たちの熱意でできてしまいました。

すてきなことは、案外近くにあるものです。まず「こんなことをしたい」と、声に出してみましょう。

